



RIETI Discussion Paper Series 20-J-039

## 誰が入学しているのか：大学難易度と推薦・AO入試の役割

小野塚 祐紀  
経済産業研究所



Research Institute of Economy, Trade & Industry, IAA

独立行政法人経済産業研究所

<https://www.rieti.go.jp/jp/>

## 誰が入学しているのか：大学難易度と推薦・A0入試の役割\*

小野塚 祐紀（経済産業研究所）\*\*

## 要 旨

本論文では、大学入試難易度と推薦・A0入試が果たしている役割との関係性を考察する。まず大学入試情報から、推薦・A0入試を導入している大学の割合が設置形態や偏差値、学部系統によってどのように異なるかを示す。そして大学生の個票データを用い、高校生時点での特性、大学内外での態度・活動、大学でのパフォーマンスという3つの観点から、学業面を中心とした様々な面において、筆記試験入試入学者と推薦・A0入試入学者の間に違いが見られるかを分析する。進学先大学の難易度データが利用できないため、この記述分析では出身高校ランクによる異質性に着目する。分析の結果は、学生がなぜ推薦・A0入試を利用しているかが出身高校ランクによって異なる可能性を示唆している。そして、高位校出身の推薦・A0入試入学者は、入学後の勉学への自主性や社会活動について望ましい特性を持ち、大学でのスキルの成長も大きいと評価している。このことから、難関大学は推薦・A0入試によって、筆記試験で測れない面で望ましい特性を持つ者を獲得できている可能性がある。しかしながら、どのランクの高校出身であっても、授業へのまじめさ、大学への満足度は推薦・A0入試入学者のほうが同ランク校出身の筆記試験入試入学者よりも高い傾向がみられ、また大学でのパフォーマンスが劣っているという証拠はみられない。推薦・A0入試に対する近年の社会的な低評価は、推薦・A0入試を導入している大学の割合が低偏差値の大学で高いことが主要因であると思われる。

キーワード：大学入試方法，推薦入試，A0入試，入試難易度

JEL classification: I23

RIETI ディスカッション・ペーパーは、専門論文の形式でまとめられた研究成果を公開し、活発な議論を喚起することを目的としています。論文に述べられている見解は執筆者個人の責任で発表するものであり、所属する組織及び（独）経済産業研究所としての見解を示すものではありません。

\* 本稿の原案に対して、恩田正行氏、経済産業研究所ワークショップ参加者から有益なコメントを頂いた。ここに謝意を表す。

\*\* 現所属：小樽商科大学

## 1. はじめに

大学入試制度は、「誰が大学に行くのか」と「誰がどこの大学に行くのか」という、学生の選抜と配置を決める役割を持っている。大学で教えられている内容や大学の雰囲気といったものは大学によってさまざまである。そのため、誰がどこの大学に行っても同じというわけではなく、学生と大学の間には補完性があるだろう。そして補完性があれば、大学入試制度は人材育成の観点から社会にとっても重要な問題となる。

日本における大学入試方法は、一般入試に代表されるような、筆記試験によって学生を評価する方法が主流である。しかし、この入試方法は筆記試験で測られる「現在の学力」に過度に依存しているとの批判を受け、過去数十年に渡っては推薦入試や A0 入試といった、調査書、志望動機書、面接などを通じて、多面的・総合的に学生を評価する方法が広まってきた。文部科学省「平成 30 年度国公立大学入学者選抜実施状況」によれば、大学入学者のうち、一般入試で入学した者が 54%、推薦入試で入学した者が 35%、A0 入試で入学した者が 10%となっている。今や推薦入試や A0 入試を利用して大学に進学した者が半数近くを占めているのである。

学生評価の方法だけではなく、実施される時期も推薦・A0 入試と筆記試験入試とは異なっている。推薦入試や A0 入試は筆記試験入試よりも早くに行われ、また基本的に専願である。つまり、推薦入試や A0 入試で合格した者のほとんどは、筆記試験入試が始まる前に進学先が決定することになる。このように、日本では評価軸と時期の両面で異なる入試方法が並立している。入試方法によって、合格している学生に違いがあると考えられる。

推薦・A0 入試は、広まってきているとはいえ、社会的な評価は必ずしも好意的なものではない。新聞記事のデータを基に A0 入試に対する社会的評価の変遷の分析をした尾室(2012)によると、詰め込み教育や「受験学力」偏重への批判から、A0 入試がそれらを打破するものとして期待されていた時期もあったが、2000 年前後から A0 入試は青田買いや大学入学時の学力低下の要因として否定的に評価されるようになった。このような中、政府は推薦・A0 入試を進める一方で、高大接続改革の一環として、2021 年度大学入試から推薦入試は学校推薦型選抜、A0 入試は総合型選抜と名称を改め、これらの選抜にあたっては大学教育を受けるために必要な学力の評価を強化することになっている（文部科学省「令和 3 年度大学入学者選抜実施要項」を参照）。だが実は以下に述べるように、入学方法による学生の違いについては未だ十分な研究の蓄積があるとは言えず、社会的なプレッシャーに政策が左右されている感も否めない。

入試方法による大学での態度や成績の違いについては、経済学での研究はほとんど見られないものの、社会学や教育学を中心に数多くの分析や報告が今までにされている。特に、推薦入試や A0 入試入学者と一般入試入学者の違いについて、個々の大学の短い事例報告は多数存在している。例えば、加藤(2010)はお茶の水女子大学での、西丸(2010)は同志社大学社会学部での大学の学術成績と入試方法の関係を報告している。渡辺、福島(2008)は A0 入試入学者の性質についての個別研究を総括している。結論として言えば、入試方法によって学術成績に明確な差は見られないとしているものが多いように見受けられる<sup>1</sup>。学術成績以外では、例えば高橋など(2017)は武蔵野大学経済学部経営学科のデータを用い、推薦・A0 入試入学者は筆記試験入試による入学者と比較して授業に主体的に取り組む傾向が強いことを示している。渡辺、福島(2008)では、A0 入試入学者は入学時付近の学習意欲が高く、入学後の満足度も高い傾向があると先行研究をまとめている。

---

<sup>1</sup> このような個別大学についての研究群については、例えば高橋など(2017)を参照していただきたい。

また、個別の大学ではなく、全体の分析をしている研究もいくつか存在する。例えば、中西(2017)は東京大学大学経営・政策研究センターによる「高校生の進路についての追跡調査」の個票データを使用し、国立大学進学者について、推薦入試やAO入試で入学した者は、高校のランクを制御しても、大学の成績でAを取る傾向が他の入試方法利用者と比べてやや弱いことを示している。浦坂など(2013)は独自のアンケート調査を行い、推薦入試やAO入試のような学力試験を課さない制度で入学した者の大学卒業後の平均年収が、一般入試などの学力試験を課す制度で入学した者のそれよりも低いことを示している。大島(2002)は全国大学生生活協同組合連合会「学生生活実態調査」の全国65校分のデータ提供を受け、授業内外に関する意識・行動について分析をし、推薦・AO入試(付属高校からの内部推薦を含む)入学者と一般入試入学者で明確な違いは見られなかったとしている。

しかしながら、これらの先行研究から推薦入試やAO入試が果たしている役割を十分に理解できているとは言えない。個別の大学についての分析では大学が管理している成績データを用いている場合が多くみられ、データの正確性という利点がある。しかし、ある大学での結果が他の大学にも当てはまる保証はない上に、今まで報告された事例には国立大学や入試難易度の高い私立大学のものが多く、全体の傾向を言うことはできない。大学全体の分析については未だ数が少なく、また、今までの研究にも問題がないわけではなく、決定的な結論を下すのは難しい<sup>2</sup>。

更に言えば、他国での研究結果を日本に当てはめることも難しい。大学入試方法は国によりさまざまであり、例えばアメリカでは早期入試という時期だけが異なる入試方法がえり抜きの大学で広く実施されている。この入試方法についてはAvery et al. (2003)にまとめられている<sup>3</sup>。しかしながら、時期と評価軸の両方で異なる入試方法を両立させている国は自分が知る限り日本しかなく、よってこのような入試方法に関する研究はされていない。

本論文では、推薦・AO入試入学者と、筆記試験入試入学者の違いを分析する。分析にあたっては、大学の入試難易度によって推薦・AO入試が果たしている役割が異なっている可能性に着目をする。大学の難易度に注目して分析を行った先行研究は見当たらないが、推薦・AO入試の現状を理解するには考慮すべきことである。先ほど述べたように、推薦入試やAO入試は青田買いや、学力低下の要因として近年では否定的に取られる傾向がある。しかし、尾室(2012)がAO入試に関して指摘しているように、入学希望者が多数いる難関大学が実施する推薦入試・AO入試と、定員確保に追われている大学が実施する推薦入試・AO入試とでは性質が異なる可能性がある。入学希望者が多数いる大学の場合、もし推薦入試やAO入試によって質の良くない学生を入学させてしまっているということがあれば、推薦入試やAO入試を止めて一般入試で質の良い学生を入学させればよいのである。

確かに、2010年頃には一部の国公立大学でAO入試の廃止も見られた。しかし、国立大学協会が2015年に公表した「国立大学の将来ビジョンに関するアクションプラン」では、国立大学は2022年度入試までに推薦入試、AO入試、国際バカロレア入試等を入学定員の30%を目標に拡大するという工程表を示している。その影響もあり、文部科学省「令和2年度国公立大学入学者選抜の概要」によると、国公立大学でのAO入試実施の大学割合、学部等割合、募集人員、の全てで2016年度辺りから大

---

<sup>2</sup> 例えば、中西(2017)はパネルデータを利用しているが、サンプル脱落によってサイズが非常に小さい。浦坂など(2013)については大学レベルを制御していないことが大きな問題と言える。

<sup>3</sup> Li and Suen (2000); Avery and Levin (2010)といった理論研究や、Jensen and Wu (2010); Chapman and Dickert-Conlin (2012)といった実証研究もある。

幅な上昇がみられている<sup>4</sup>。東京大学では2016年度入試から、一橋大学では2018年度入試から、後期日程の代わりに全学部で推薦入試を実施しているように、難関大学でも学力以外を評価する入試方法の活用がみられている<sup>5</sup>。

本論文では、まず大学の入試情報を用いて、導入している入試方法と大学の特徴についてまとめる。具体的には、推薦入試やA0入試を導入している大学の割合が設置形態や偏差値、学部系統によってどのように異なるかを概観する。低偏差値の私立大学、特に文系学部でこのような入試方法が導入されていると世間一般で言われることが多いが、実際にそのことがデータでまとめられていることはほぼない。文部科学省「国公立大学入学者選抜実施状況」にて、一般入試、推薦入試、A0入試などを含むそれぞれの入試方法について、実施大学・学部数、入学志願者数、合格者数、入学者数が設置形態別に毎年報告されているものの、それらの情報は偏差値や学部系統別には公表されていない<sup>6</sup>。そのため、この節でより詳しく大学の特性と導入している入試方法の関係をデータで確認する。

次に本論文の主要分析として、「第一回大学生の学習・生活実態調査」の個票データを用い、どのような学生が推薦入試やA0入試を利用して大学に進学しているのかを分析する。ここでは、高校生の時の行動・態度、大学内外での行動・態度、大学でのパフォーマンス、の3つの切り口で、学業面を中心にその他の面も含めて分析を行う。なお、大学名のデータは公表されていないため、ここでの分析にあたっては大学の入試難易度ではなく出身高校の大学進学度による異質性に注目をする。本論文は基本的な記述分析となるが、大学の入試難易度や出身高校の大学進学度・難易度に注目して分析を行ったのは筆者が知る限り本論文が初めてであり、本研究において高校生時点の特性、大学生時点の特性を包括的にまとめておくことは、今後の大学入試方法の研究のために必要不可欠であると考えている。

結果を簡単に述べておく。まず大学の入試情報を用いた分析によると、A0入試は私立大学の文系学部と偏差値の低い理系学部で導入割合が高く、8割にもものぼった。一方、国公立大学では学部系統や偏差値に関係なく、A0入試を導入している大学は半数以下であった。推薦入試については、設置形態や学部系統、偏差値に関わらず、大部分の大学で導入されていた。

学生の個票データを用いた分析では、出身高校のランクによって学生の推薦・A0入試の利用方法が異なっていることが示唆された。低位高校では高校時代にアルバイトや部活動に精を出してあまり勉強していなかった者が大学に進学する手段として利用している一方で、高位高校ではもともと大学には進学するつもりの方が推薦・A0入試に有利な特性を持っていたという理由で利用しているということが示唆された。そして、高位高校出身の推薦・A0入試入学者は筆記試験で測れない側面、例えば勉学への自発性や社会活動への態度、で筆記試験入学者よりも望ましい傾向を持つことがみられた。ただし、出身高校のランクに関わらず、推薦・A0入試入学者の方が同ランク校出身の筆記試験入試入学者よりも大学の授業に対してまじめな傾向があり、彼・彼女らが大学において学業面や態度で劣っているという証拠はみられなかった。

本論文の残りの構成は以下の通りである。第2節では、大学入試情報を用いて入試方法と大学の特徴を概観する。第3節ではその後の分析に使用するデータの説明をする。第4節では学生の個票デー

---

<sup>4</sup> 2010年度にA0入試が廃止された九州大学法学部では2015年度入試から再びA0入試が実施されている。

<sup>5</sup> 現在、一橋大学では経済学部のみ後期日程が実施されている。

<sup>6</sup> その他の入試方法には、専門高校・総合学科卒業生入試、帰国子女入試、中国引揚者等子女入試、社会人入試がある。

タを用いて推薦・AO入試入学者と筆記試験入試入学者との違いを分析する。第5節で本論文のまとめを述べる。

## 2. 入試方法と大学の特徴

この節では、2020年度の大学入試情報を用いて、推薦入試、AO入試を導入している大学の特徴を大まかに捉える。ここでは、株式会社旺文社と株式会社教育デジタルソリューションズが共同で管理・運営をしている「大学受験パスナビ」サイトのデータを利用した<sup>7</sup>。少なくとも一つの学部・学科でAO入試（推薦入試）が行われている場合にその大学でAO入試（推薦入試）が導入されていると数えている。

表1では推薦入試、AO入試を導入している大学数を、全体、設置形態別、学部系統別、偏差値別にそれぞれ示した<sup>8</sup>。偏差値は、偏差値50を境に、低偏差値と高偏差値の2つのグループに分けている。全国にある計782校の大学のうち、AO入試を導入している学校は544校（70%）、推薦入試を導入している学校は723校（92%）となっており、ほぼ全ての大学が推薦入試かAO入試のどちらか、またはその両方を導入していることがわかる。設置形態別では、国公立大学182校のうち、AO入試があるのは79校（43%）、推薦入試があるのは164校（90%）、一方、私立大学600校のうち、AO入試があるのは465校（78%）、推薦入試があるのは559校（93%）となっている。推薦入試については設置形態に関わらずほぼ全ての大学で行われている。AO入試については8割近くの私立大学で行われている一方、国公立大学では半分以下の大学でしか行われていない<sup>9</sup>。

表1 推薦入試、AO入試がある学部を持つ大学数

	全体	国公立	私立	文系	理系	低偏差値	高偏差値
全体	782 (100%)	182 (100%)	600 (100%)	555 (100%)	346 (100%)	644 (100%)	271 (100%)
AO入試あり	544 (70%)	79 (43%)	465 (78%)	412 (74%)	225 (65%)	477 (74%)	149 (55%)
推薦入試あり	723 (92%)	164 (90%)	559 (93%)	514 (93%)	307 (89%)	609 (95%)	231 (85%)

学部系統別に見た場合、文系学部を持つ大学555校のうち、AO入試を行う文系学部をもつ大学は412校（74%）、推薦入試を行う文系学部を持つ大学は514校（93%）である。一方、理系学部を持つ大学346校のうち、AO入試を行う理系学部を持つ大学は225校（65%）、推薦入試を行う理系学部を持つ大学は307校（89%）となっている。つまり、推薦入試はどちらの学部でも大部分の大学で行われ

<sup>7</sup> <https://passnavi.evidus.com/>（2020年3月19日アクセス）

<sup>8</sup> 文系学部は、文学部、外国語学部、人文・教養・人間科学部、教育・教員養成系学部、法学部、経済・経営・商学部、社会・社会福祉学部、国際関係学部を含む。理系学部は、理学部、工学部、農・獣医畜産・水産学部、医学部、歯学部、薬学部を含む。

<sup>9</sup> 入学者数では設置形態によってより大きな違いが見られる。文部科学省「平成31年度国公立大学入学者選抜実施状況」によれば、国公立大学入学者のうち、80%が一般入試、16%が推薦入試、4%がAO入試で、私立大学入学者では、46%が一般入試、43%が推薦入試、12%がAO入試となっている。このことは、私立大学のほうが推薦入試・AO入試による募集人員の割合が大きいことを意味している。

ているが、A0入試については文系学部でやや行っている大学が多いことがわかる。

そして偏差値別では、低偏差値学部を持つ大学のうちA0入試がある低偏差値学部を持つ大学は74%、推薦入試がある低偏差値学部を持つ大学は95%である。一方で、高偏差値学部を持つ大学のうちA0入試がある高偏差値学部を持つ大学の割合は55%、推薦入試がある高偏差値学部を持つ大学の割合は85%となっており、偏差値が低い学部の方でA0入試や推薦入試がより導入されている傾向がみられる。

設置形態、学部系統、偏差値によって推薦入試やA0入試の導入割合が異なることが示されたが、それではそれらを組み合わせた場合にどのような特徴がみられるだろうか。表2では学部系統別に、設置形態と偏差値の組み合わせでの結果を示した。興味深いことに、国公立大学では、A0入試の割合が低偏差値の文系学部でやや低いことはあるものの、学部系統、偏差値に関わらず推薦・A0入試の導入割合がそれほど変わらないことがわかる。私立大学の場合、低偏差値の理系学部を持つ大学のうちA0入試を導入している低偏差値の理系学部がある大学が8割を超えているのに対して、高偏差値の理系学部を持つ大学での導入割合では半分以下と、非常に大きな差がみられる。一方で文系学部の場合には偏差値によって大きな差は見られない。これは、文系学部のほうが、コミュニケーション能力のような、学力試験で測れない能力が大事だからかも知れない。しかし国公立大学では学部系統による大きな違いが見られないため、この理由については今後更なる分析が必要である。推薦入試については、高偏差値のほうが導入割合は高いものの、どの組み合わせでも大部分の大学で導入されていることがわかる。

表2 学部系統・設置形態・偏差値別、推薦入試、A0入試がある学部を持つ大学数

A: 文系	国公立大学		私立大学	
	低偏差値	高偏差値	低偏差値	高偏差値
全体	61 (100%)	79 (100%)	400 (100%)	98 (100%)
A0入試あり	20 (33%)	33 (42%)	338 (85%)	78 (80%)
推薦入試あり	56 (92%)	70 (89%)	383 (96%)	80 (82%)
B: 理系	国公立大学		私立大学	
	低偏差値	高偏差値	低偏差値	高偏差値
全体	77 (100%)	84 (100%)	186 (100%)	87 (100%)
A0入試あり	34 (44%)	39 (46%)	150 (81%)	38 (44%)
推薦入試あり	66 (86%)	70 (83%)	178 (96%)	69 (79%)

この結果からすると、学生の確保が難しい低偏差値の私立大学が学生確保のためにA0入試を導入しているという面はあるように思える。しかしながら、それ以外の少なくない数の大学でもA0入試

が導入されていることには注目すべきである。また、推薦入試に関しては偏差値に関係なく大部分の大学で導入されている。「低偏差値大学の学生確保」というのは総合的・多面的な入試方法の導入理由の一つではあるかもしれないが、その他の理由もあると考えられる。このような大学の特性と入試方法との関係を踏まえて上で、以下では入試方法と入学した学生の特性との関係性を分析する。

### 3. データ

推薦・A0入試入学者と筆記試験入試入学者の違いを分析するにあたり、「第一回大学生の学習・生活実態調査」の個票データを使用する<sup>10</sup>。この調査は2008年10月上旬に株式会社ベネッセコーポレーションによって実施された<sup>11</sup>。調査対象は、留学生、社会人経験者を除いた、18歳から24歳の大学1年生から4年生で、調査の回答者は、モニター母集団から、調査対象者の条件に該当する者のうち、文部科学省「平成20年度学校基本調査（速報）」の男女比・学部系統別の比率を参考にして無作為抽出され、男性2,439人、女性1,631人の計4,070人が回答した<sup>12</sup>。調査はインターネットで行われた。本調査では、高校での学習態度、大学への進学選択、大学の満足度、大学での学習態度・活動など、幅広い事柄について尋ねており、本研究において入試方法による学生の違いをさまざまな面で捉えることが可能となる。

そのほか本調査の利点として挙げられるのは、回答者が現在の大学・学部にどの入試方法で受験したのかを尋ねていることである。回答者は、一般入試、センター入試、附属高校推薦、推薦入試、帰国生入試、編入学、A0入試、その他、の8つの選択肢の中から1つを選んでいる。本研究では、この回答を利用して、筆記試験入試組と推薦・A0入試組の2つのグループに分ける。筆記試験入試組は、一般入試、もしくは、センター入試と回答した者を含み、推薦・A0入試組は、推薦入試、もしくは、A0入試と回答した者を含む<sup>13</sup>。そのほかの入試方法を選んだ者はサンプルから落とす<sup>14</sup>。このグループ分けの基準は、入試において、筆記試験によって測られる学力以外の面が考慮されるか否か、である。推薦・A0入試組だからといって、必ずしも筆記試験の結果が考慮されなかったわけではない。大学によっては、大学が実施する学力検査やセンター試験の成績提出を課す場合もある。ただし、推薦入試とA0入試では、書類審査や面接などを通し、筆記試験では捉えきれない学力・非学力を重視することになっている<sup>15</sup>。

この調査では、卒業した高校名や通学している大学名のデータは残念ながら公表されていないが、

---

<sup>10</sup> 二次分析にあたり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJデータアーカイブから「大学生の学習・生活実態調査，2008」（ベネッセ教育総合研究所）の個票データの提供を受けた。

<sup>11</sup> 「大学生の学習・生活実態調査」は2020年8月現在までに2008年、2012年、2016年の計3回行われているが、第2回、第3回の個票データは公開されていない。

<sup>12</sup> 調査報告書によると、学校基本調査と比べ、回答者の基本属性は、国立大学に通っている者が7パーセンテージポイント程度高く、私立大学に通っている者は9パーセンテージポイント低い。また、大学所在地を「関東」である者が5パーセンテージポイント高い。学部系統では、「人文科学」「理工」で4パーセンテージポイント程度高くなっている。詳しくはベネッセコーポレーション(2009)を参照。

<sup>13</sup> 本研究の分析サンプルでは、筆記試験入試組のうち約8割が一般入試と回答した者である。また、推薦・A0入試組の約8割が推薦入試と回答した者となっている。

<sup>14</sup> 帰国生入試、編入学、その他、の入試方法は、他と大きく異なり、また利用人数も少ないことからサンプルから落とす。附属高校推薦については、これは附属高校の役割や設置の話に関連してきてしまい、本研究が焦点を当てた大学入試制度の範疇をこえてしまっているため、サンプルから落とすことにする。

<sup>15</sup> 逆に、一般入試であっても、医学部の場合には筆記試験の他に面接が課され、非学力の面も可否の判断材料になっているが、あくまでも筆記試験の結果のほうが重視されるということで、筆記試験入試組に含むとする。



卒業した高校では卒業後にどのような進路を選ぶ人が多いのかを調査回答者に尋ねている。そこで、この質問を用いて出身高校ランクの変数を作成する。回答者は4つの選択肢の中から1つを選んでおり、本研究では、「国公立大学や難関私立大学への進学者が多い」を選んだ者を高位高校出身者、「中堅レベルの大学への進学者が多い」を選んだ者を中位高校出身者、「短大や専修・専門学校への進学者が多い」もしくは「就職や就職希望者が多い」を選んだ者を低位高校出身者と定義する<sup>16</sup>。

大学での専攻分野については、調査で回答されている学部系統を用いて、理系学部と文系学部の2つにまとめる。芸術系統と回答した者については分析サンプルから落としている<sup>17</sup>。これは、芸術系統は一般的な他の学部系統と比べて求められる資質や技能が大きく異なるためである。ただし、いわゆる「スポーツ推薦」で進学した者や、「文化推薦」だが芸術系統以外の学部系統に進学した者についてはこの調査では区別できず、サンプルに含まれたままであることには注意が必要である。

そのほか分析に用いた質問に回答していない者をサンプルから落とした結果、分析サンプルのサイズは、男性2,254人、女性1,486人の計3,740人となった。

### 3.1. 基本統計量

表3は分析サンプルの基本統計量を示している。大学設置形態、学部系統、出身高校ランクという点で、基本的に、第2節で示した入試方法と大学の特性の関係性に整合的な特徴が示されている。このサンプルでは、26%の人が推薦・A0入試組に属している。国公立大学の割合は、筆記試験入試組では40%、推薦・A0入試組では17%となっており、推薦・A0入試組の大部分は私立大学に所属していることがわかる。女性割合は推薦・A0入試組のほうが高くなっている。これは、推薦・A0入試組では理系学部の者が少ないことも関係していると思われる。また、2つのグループ間で出身高校のランクに大きな違いが見られる。筆記試験入試組のうち約半分は高位高校、もう半分は中位高校出身であり、低位高校出身者は非常に少ない。一方、推薦・A0入試組では、半分以上が中位高校出身者で、約3割が低位高校出身者となっている。

## 4. 分析

高校生時点での特性、大学内外での態度・活動、大学でのパフォーマンス、という大きく3つの切り口から記述分析を行う。それぞれについて、学業面を中心としたさまざまな面で、利用した大学入試方法によって学生に違いが見られるか、そして出身高校のランクによってその違いに異質性が見られるかということを分析する。

もちろん、出身高校のランクと進学先大学の難易度は一対一に対応していない。高位高校の者でも難易度の低い大学に進学する者もいるし、逆に低位高校の者で難関大学に進学する者もいる。そのため、ここでの分析ではそれぞれの難易度の大学がどのような学生を推薦・A0入試、筆記試験入試で獲得しているのかを結論づけることはできない。ただ、出身高校ランクと進学先難易度には正の相関があり、平均的にみれば、高位高校の者は難関大学に進学し、低位校の者は難易度の低い大学に進学

---

<sup>16</sup> 本分析では出身高校ランクと呼ぶものの、必ずしもこの分け方が高校の偏差値や教育レベルと一致していないことは注意が必要である。

<sup>17</sup> 理系学部は以下の学部系統を含む：保健衛生系統（保健、保健医療、看護、看護医療など）、医学（医学部）、歯学（歯学部）、薬学系統（薬学部など）、理学系統（理学部、生命科学、地球環境など）、工学系統（理工学部、システム工、情報工など）、農学・水産学系統（農、水産、生物資源、獣医、酪農など）。文系学部は芸術系統を除いたそのほか全ての学部系統を含む。

する。また、先ほど低偏差値、高偏差値どちらの大学でも推薦・A0入試と筆記試験入試の両方の入試方法をとっていることがみられたことから、利用入試方法に関わらず、高位高校の者は難関大学に、低位高校の者は難易度の低い大学に平均的に進学すると仮定すれば、本分析で見られる出身高校のランクによる学生の異質性はそのまま大学難易度による学生の異質性となる。もちろん、各入試方法の募集人員割合の関係から、実際にこのような仮定が成り立つかは確かなことは言えない。出身高校ランクと進学先大学難易度の関係を明らかにするには、これら両方の情報を備えたデータが必要であり、将来的に取り組みられるべきことである。

なお、以下の分析では性別を制御していないが、性別を制御しても同様の結果が得られる。

表 3 基本統計量

	筆記試験入試組	推薦・A0入試組
割合	0.74	0.26
国公立大	0.40	0.17
女性	0.38	0.45
理系	0.37	0.31
出身高校ランク**		
低	0.08	0.29
中	0.42	0.50
高	0.51	0.22
人数	2,760	980

\*: 理系学部は、保健衛生系統、医学、歯学、薬学系統、理学系統、工学系統、農学・水産学系統を含む。

\*\*: 低：就職や就職希望者が多い、短大や専修・専門学校への進学が多い

中：中堅レベルの大学への進学者が多い

高：国公立大学や難関私立大学への進学者が多い

#### 4.1. 高校生時点での特性

表 4 は出身高校ランク別にそれぞれの入試組がどのぐらいいるのかを示している。推薦・A0入試組の割合は出身高校ランクと反比例している。低位高校出身大学生のうち60%近くが推薦・A0入試組であり、推薦入試やA0入試は低位高校出身者にとっては大学に進学するための一般的な方法となっているのがわかる。これはよく世間で持たれがちな、「大学全入時代に入り、十分な学力を持っていない生徒が大学に進学するための手段として推薦入試やA0入試が使われている」というイメージと合致しているように思われる。しかし一方で、割合は低くなるが、中位高校や高位高校といった、大学進学に十分な学力を持っていると思われる層でも、推薦入試やA0入試を利用している者はある程度存在している。つまり、このような入試方法が必ずしも学力が十分でない学生を大学に進学させやすくするためだけにあるわけではなさそうである<sup>18</sup>。

<sup>18</sup> 推薦・A0入試組における推薦入試入学者、A0入試入学者の割合は出身高校ランクによって違いがみられる。A0入試入学者の割合は、高位校出身者では21%、中位校出身者では17%、低位校出身者では13%となっている。推薦入試入学者とA0入試入学者の違いは興味深い話であるが、本研究ではサンプルサイズの関係から2つの入試方法を分けて分析を行う。これらの入試入学者の割合の違いが以下の分析での出身高校レベルによる異質性を引き起している可能性もある。

まず勉強面についての違いを明らかにする。使用した調査では、高校1・2年生の時の、学校での授業以外の平日1日の勉強時間数を尋ねている<sup>19</sup>。それによると、筆記試験入試組の平均は1.2時間、推薦・A0入試組は1時間となっており、推薦・A0入試組の勉強時間のほうが短いことがわかる。しかし、出身高校レベル別にすると非常に興味深い結果がみられる。図1が示すように、筆記試験入試組と推薦・A0入試組の平均勉強時間の差は出身高校ランクによって違いがある。低位高校出身者の間では、筆記試験入試組が0.9時間、推薦・A0入試組が0.6時間と、推薦・A0入試組の勉強時間のほうが確かに短い。その差は出身高校ランクが上がると共に小さくなり、高位高校出身者の間では、筆記試験入試組が1.4時間、推薦/A0入試組が1.5時間と、わずかながら推薦・A0入試組の勉強時間の方が長くなっている。全体の平均で推薦・A0入試組の勉強時間が筆記試験入試組のものよりも短いのは、出身高校ランクと勉強時間には正の関係性があることと、推薦・A0入試組のほうが筆記入試試験組よりも低いランクの高校出身の学生割合が高いことが理由であるのがわかる。

表4 出身高校レベル別、入試組割合

	出身高校ランク			計
	低	中	高	
筆記試験入試組	207 42%	1,157 70%	1,396 87%	2,760 74%
推薦・A0入試組	283 58%	486 30%	211 13%	980 26%
計	490 100%	1,643 100%	1,607 100%	3,740 100%

高校生の時の勉強の様子を示す別の指標として、学校や家での勉強の様子についての指標を作成する。使用している調査では、「予習をしてから授業を受けていた」など学校や家での勉強に対するまじめさを中心とした11の項目に対して、回答者自身が「とてもあてはまる」から「全くあてはまらない」までの4段階で評価をしている<sup>20</sup>。これらの回答について主成分分析を使い、「まじめさ」を表す1つの指標を作成した。指標は全体での平均が0、標準偏差が1となるように標準化した。

この指標についても、全体では筆記試験入試組の平均値が0.02、推薦・A0入試組の平均値が-0.07と、推薦・A0入試組のほうが低い。出身高校ランク別に分けると、必ずしも推薦・A0入試組の方が低いわけではない。図2に見られる通り、低位高校出身者と高位高校出身者では推薦・A0入試組の方が筆記試験入試組よりも高校時代に勉強にまじめに取り組んでいたとなっている。特に高位高校出身者では、筆記試験入試組の平均値が0.16であるのに対して、推薦・A0入試組が0.29と大きな差がみられる。先ほどと同様、出身高校のランクとまじめさの値には正の関係があり、推薦・A0入

<sup>19</sup> 回答者は、ほとんどしなかった、およそ30分、1時間、1時間30分、2時間、3時間、4時間、5時間、それ以上、の9つの選択肢から一つ選んでいる。ここでの分析ではそれぞれ、0分、30分、1時間、1時間30分、2時間、3時間、4時間、5時間、6時間、を勉強時間数として当てはめている

<sup>20</sup> 使用した質問項目は、予習をしてから授業を受けていた；黒板に書かれていなくても、先生の話で大切なことはノートに書いていた；授業でわからないことは先生に質問した；授業でわからないことは、あとで自分で調べた；学校で出された宿題や課題をきちんとやっていた；授業で習ったことは、その日のうちに復習した；勉強方法を自分なりに工夫した；テストで間違えた問題をやり直した；計画を立てて勉強した；自分の意思で毎日コツコツ勉強した；嫌いな科目も一生懸命勉強した、の11項目である。

試組の全体の平均値が低いのは、出身高校のランクが低いほど推薦・AO 入試組の割合が高いためであることがわかる。

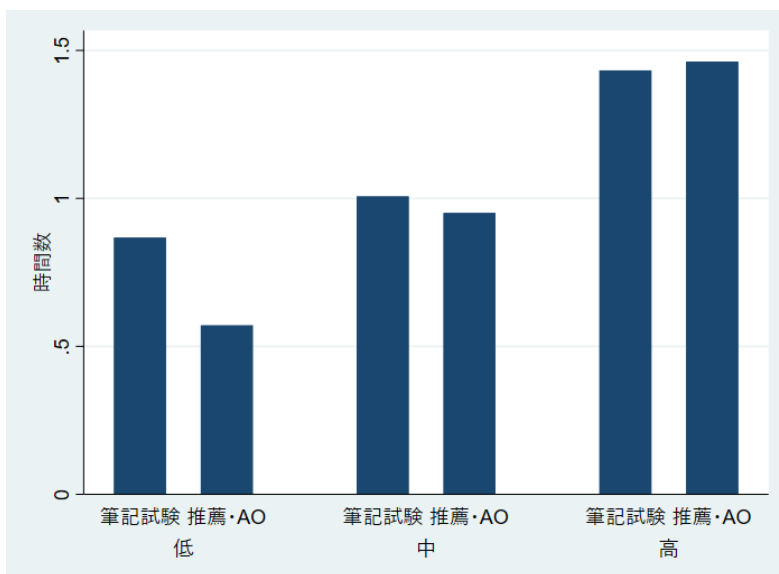


図 1 出身高校ランク・入試方法別、高校1・2年生時の平均の平日1日勉強時間数（学校での授業以外）

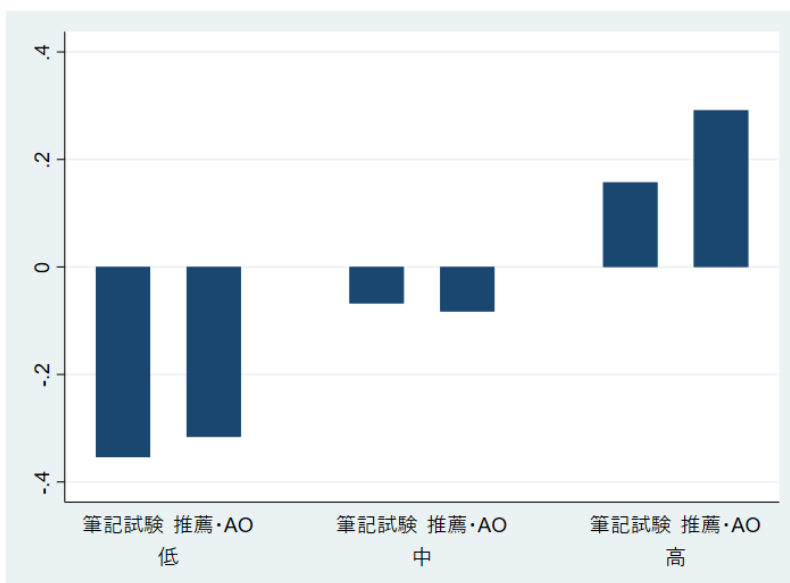


図 2 出身高校ランク・入試方法別、「まじめさ」の平均値（全体平均0、標準偏差1）

この調査では学生の学力の直接的な指標や、進学先大学の入試難易度はわからないが、先ほどの勉強時間の結果と合わせると、推薦・AO 入試組であれ、筆記試験入試組であれ、出身高校ランクと進学先大学難易度はおそらく比例している。高位校出身の推薦・AO 入試入学者は難関大学に進学する傾向があるだろう。この調査は自身での振り返りという限界はあるが、彼・彼女らは筆記試験入試で大学に進学した者たちよりも高校時代にまじめに勉強をしていたのである。

勉学以外の面についてはどうだろうか。図 3 は、いくつかの項目について高校生活でどのぐらい力を入れたかを、出身高校ランク・入試方法別に平均を示している。ここでは、各項目の合計が 10

割となるように作られている<sup>21</sup>。低位校出身者では、推薦・AO入試組の方がアルバイトや部活動の割合が大きくなっている。ただし先ほど述べたように、この分析サンプルには「スポーツ推薦」や「文化推薦」で大学に進学した者も含まれており、そのことがこの結果に影響している可能性もある。そのため解釈には注意が必要である。一方、中位校、高位校出身者については、入試方法による大きな違いはみられなかった。

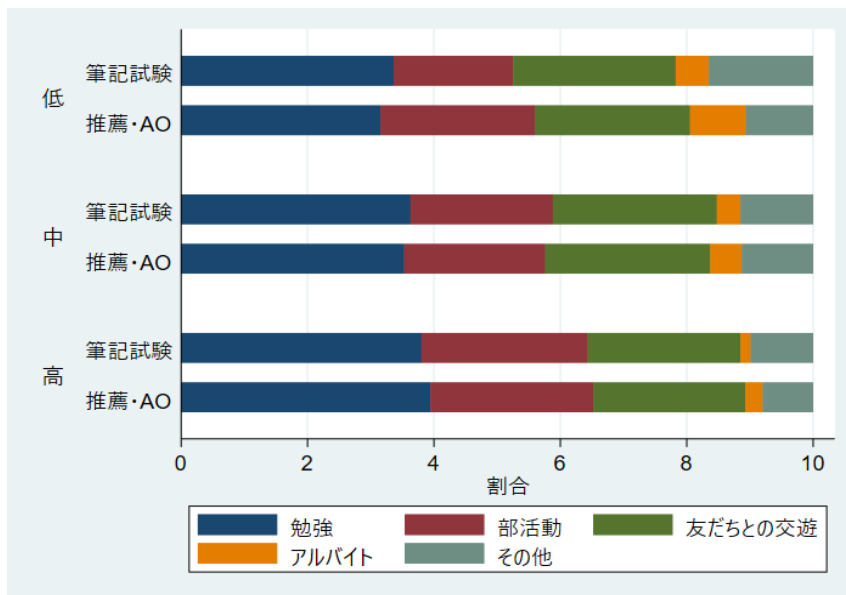


図 3 出身高校ランク・入試方法別、高校生活で入れた力の割合の平均

大学受験対策に関する態度や行動についてみてみよう。まず大学受験対策を始めた時期だが、図 4 が示すように、高校のランクが上がるにつれて大学受験対策を早めに始めた傾向がみられる。筆記試験入試組と推薦・AO入試組の違いとしては、低位高校では推薦・AO入試組のほうが受験対策を始めた時期が遅くなっている一方、その差は高校のランクが上がるにつれ小さくなり、高位高校出身者では、推薦・AO入試組のほうが早めに受験対策を始めたことがわかる。

また、図 5 では推薦・AO入試入学者がどのような大学受験対策に取り組んだのかを示している<sup>22</sup>。もちろん推薦・AO入試準備に取り組んだ者の割合はどのランクの高校の出身でも高い。しかし、低位校の場合は 90%、高位校の場合は 78%と、ランクが高くなるほどその割合は低くなっている。そして筆記試験入試準備については出身高校レベルによって大きな差がみられる。低位校出身者の場合は 32%と半分以下の者しか取り組んだと回答していないが、高位校出身者では 67%の者が取り組んだと回答している。低位校出身者では、推薦・AO入試での大学進学しか考えていなかった者も一定程度存在する一方で、高位校出身者では多くの者が大学には何かしらの入試方法で進学する予定であったことが示唆される。高位校出身者は、筆記試験入試の準備をもともと進めていたものの、途中、

<sup>21</sup>差はわずかではあるが、今までと同様、ここでも勉強では低位高校出身者の間では筆記試験入試組の方が、高位高校出身者の間では推薦・AO入試組の方が、勉強に入れた力の割合が大きい。

<sup>22</sup> 筆記試験入試準備をした者は、センター試験に対応した教科学習、国公立二次試験に対応した教科学習、私立大学入試に対応した教科学習、のうち少なくとも一つに取り組んだと回答している者で、推薦・AO入試準備をした者は、小論文の準備、志望理由書・自己推薦書作成、面接の準備、プレゼンテーション・ディスカッション、実技（体育・美術・音楽・デザインなど）、のうち少なくとも一つに取り組んだと回答している者である。

何らかの理由で推薦入試やAO入試を利用することにした可能性もある<sup>23</sup>。

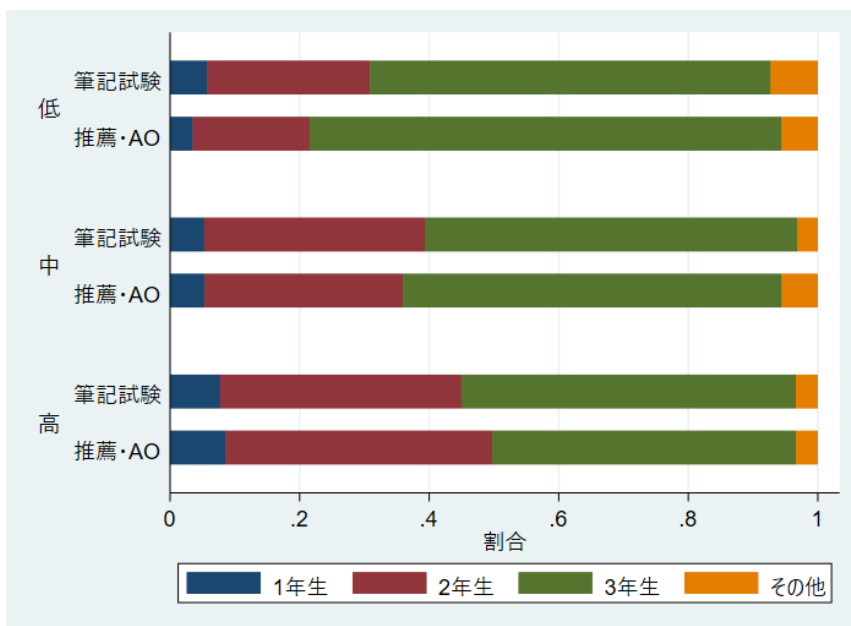


図 4 出身高校ランク・入試方法別、大学受験対策開始時期

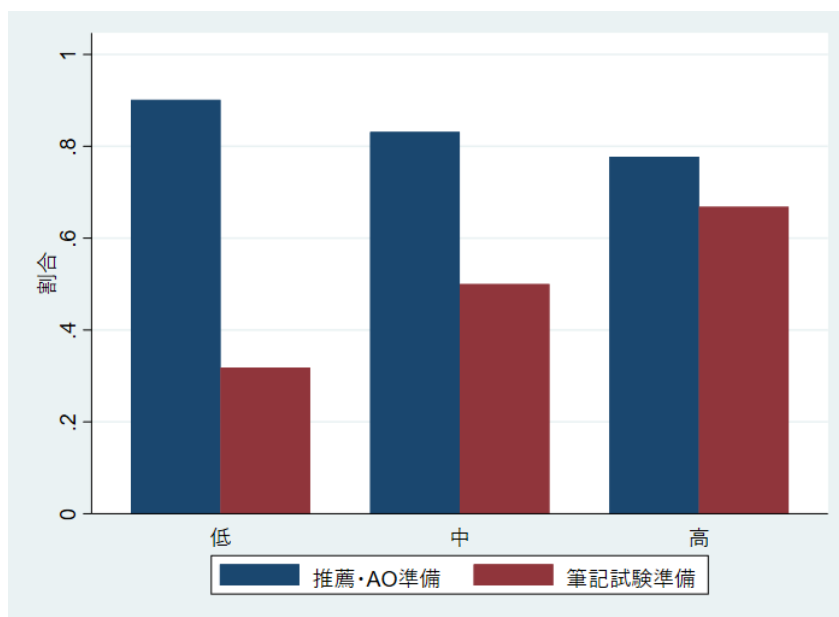


図 5 出身高校ランク別、大学受験対策で取り組んだと回答した者の割合：推薦・AO入試入学者

推薦・AO入試の一般的な理念の1つとして、大学への熱意が高い者を受け入れる、というのがあ  
るだろう。大学への熱意は入試での評価基準の1つでもあるし、入試の時期が早いことも熱意が高い

<sup>23</sup> データがないため本論文では分析できないが、Li and Suen (2000)のモデルのように、筆記試験で失敗するリスクを避けるために推薦・AO入試を利用することも考えられる。また、早く受験を終わらせたいという、時間選好率の影響も考えられる。使用している調査では、受験する大学・学部を決める際に重視した点(複数可)として、「合格が早く決まること」を選んだ割合は、低位校で21%、中位校で24%、高位校で26%であった。ただし、この質問ではなぜ推薦・AO入試を利用したかを尋ねたわけではなく、解釈には注意が必要である。

者を受け入れにつながるだろう<sup>24</sup>。実際、渡辺、福島(2008)によると、AO入試入学者の入学後の満足度が高いとするデータも見られている。渡辺、福島が紹介しているのは国立大学や難関私立大学の研究だが、図6によると、出身高校ランクに関わらず、推薦・AO入試組の方が筆記試験入試組よりも、入りたいと思って進学した者が多い傾向がみられる。特に、高位高校出身の推薦・AO入試組では、半分以上の者が、「ぜひ入りたい」と回答している。

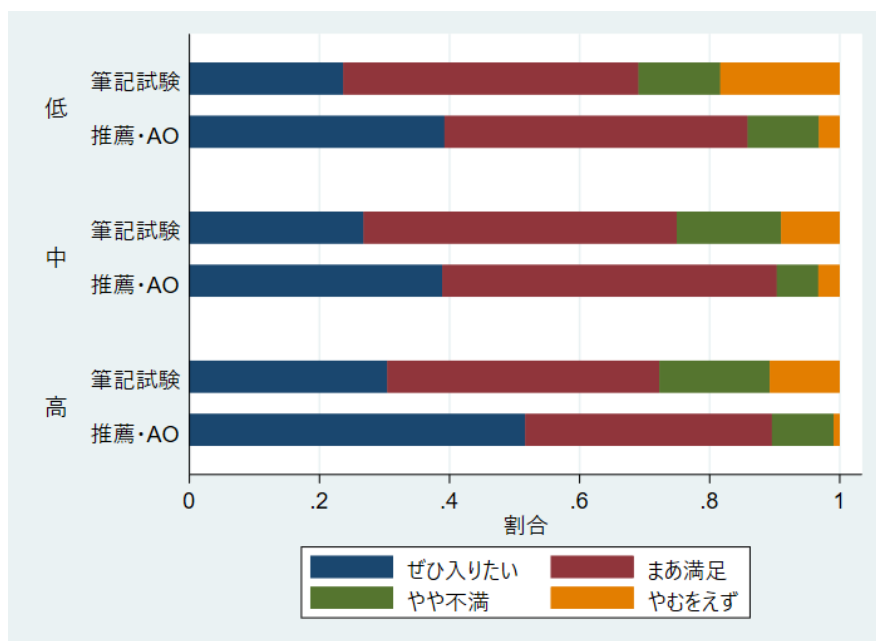


図6 出身高校ランク・入試方法別、進学時の満足度

ここまでの高校生時点での特性についての結果をまとめる。先行研究ではあまり注目されてこなかったが、出身高校のランクによる異質性がみられ、出身高校のランクによって推薦入試やAO入試の学生の利用の仕方が異なっていることが示唆される。ランクが低い高校では、アルバイトや部活動に精を出していてあまり勉強していなかった者が大学に進学するための手段として推薦入試やAO入試を利用している可能性がある。彼・彼女らは大学受験対策を始める時期も遅めで、また筆記試験入試の対策をしている者の割合は半分以下となっている。この層については推薦入試やAO入試がなかった場合には大学に進学しなかった可能性も否定できない。

一方、ランクが高い高校出身の推薦・AO入試入学者は筆記試験入試入学者と比較して高校時代にまじめに勉強をしていた傾向があった。大学受験対策を始める時期も早めで筆記試験対策をしていた者も半数以上いたことから、もともと大学には進学するつもりの方がなんらかの理由で推薦入試やAO入試を利用したのが大半だと考えられる。それは、その学生が推薦入試、AO入試に有利な特性（例：まじめさ、大学との良いマッチ）を備えていたのかも知れないし、あるいは早く受験を終わらせたかったのかも知れない。

<sup>24</sup> アメリカの早期入試方法に関して、Avery and Levin (2010)では学生は早期入試に出願することでその大学に熱意をシグナリングできるというゲーム理論的モデルを提示している。

#### 4.2. 大学内外での態度・活動

これまで高校生時点での特性について述べてきた。本項では大学内外での態度や活動について述べていく。高校時点での特徴は大学でも引き続きみられるのだろうか。まず大学への熱意として、調査時において他の大学に入り直したいと思う頻度を利用する。回答者は「よくある」から「全くない」の4段階で答えている。これについては学年とともに変化をする可能性があるため、他の大学に入り直したいと思う頻度を被説明変数、定数項、推薦・A0入試組ダミー、学年ダミーを説明変数として、出身高校ランク別に順序ロジットモデルで推定を行った。表5の結果が示す通り、出身高校ランクに関わらず、推薦・A0入試組の方が他の大学に入り直したいと思う頻度が少ない傾向がある。つまり、進学時にみられた推薦・A0入試組の大学への熱意・満足度の高さは大学進学後でもある程度持続していると言えるだろう。ただし先ほどの項でみた進学時の気持ちとは違い、ここでは出身高校ランクによって影響に大きな違いはみられない。

表5 出身高校ランク別、他の大学に入り直したいと思う頻度（順序ロジット）

	低	中	高
推薦・A0入試組	0.2742* (0.1651)	0.2142** (0.0979)	0.2353* (0.1361)
/cut1	-1.3141 (0.1907)	-1.7406 (0.1064)	-1.4963 (0.1062)
/cut2	0.0459 (0.1790)	-0.2777 (0.0953)	-0.1270 (0.0979)
/cut3	0.7267 (0.1822)	0.6537 (0.0963)	0.7810 (0.0998)
観測数	490	1,643	1,607

被説明変数：他大学に入り直したいと思う頻度：3:全くない，2:あまりない，1:たまにある，0:よくある

説明変数：定数項、学年ダミーも含む

\*\*\*: 1%水準で有意， \*\*: 5%水準で有意， \*: 10%水準で有意

次に、勉強面での態度・取り組みについて、出身高校ランク別、入試方法別に違いがあるのかを確認する。ベネッセ教育総合研究所が2013年に高等学校長および大学学科長を対象に行った「高大接続に関する調査」の報告書によれば、大学側は一般入試と比較して一般推薦入試、A0入試の方が、口頭での表現力、学問領域に対する関心・意欲、なにごとにも能動的に取り組む姿勢をよく把握できると回答している傾向がある。本研究で使用している調査では、大学の授業への取り組みに関する26項目について、回答者が「とてもあてはまる」から「全く当てはまらない」までの4段階で自身の評価をしている。ここでは、この回答に主成分分析を行い、「双方向性」、「まじめさ」、「自発性」という3つの指標を作成した。「双方向性」指標は、値が高いほど、グループワークやディスカッションで貢献するといった、主に口頭でのコミュニケーションをよく取ることを表している。「まじめさ」指標は、授業中に私語をせずに取り組む、授業で出された宿題や課題をきちんとやる、できるだけ良い成績をとろうとするといった、授業に関しての態度を表現している。そして「自発性」指標は、授業で興味をもったことについて自主的に勉強する、計画を立てて勉強する、というように授業で求め



られたこと以上に自主的に勉強しているかを示している。これらの指標を作成するのに使用した項目は付録に提示する。それぞれ作成された指標は、平均0、標準偏差1に標準化する。

表6では、それぞれの指標を、定数項、推薦・A0入試組ダミー、学年ダミー、理系ダミーへと、出身高校ランク別に回帰した結果を示した。学年ダミー、理系ダミーを説明変数に入れたのは、学年や学部系統によって授業のスタイルや求められるスキルが大きく異なる可能性があるためである。

先ほど高校生の時点では、まじめさについては高位高校出身者でしか入試方法により有意な差がみられなかったが、大学ではどの出身高校ランクでも推薦・A0入試組のほうが有意に高い数値となっている。特に低位校出身者では非常に大きな差がみられる<sup>25</sup>。授業で求められることを超えて自発的に勉強するかについては、高位高校出身者でのみ、推薦・A0入試組の方が筆記試験入試組よりも有意に値が高かった。意外なことに、双方向性についてはどの出身高校ランクでも入試方法による差は有意ではなかった。

この結果には、推薦入試やA0入試によって、授業に対してまじめな者や、自発的に勉強する性質を持った者が合格したというだけでなく、大学への熱意や大学とのマッチの質が影響している可能性も考えられる。望んでいた大学に入れた者のほうがやる気を持って真剣に大学での勉学に取り組んでいるという可能性を調べるため、先ほどの回帰式の説明変数に、進学時の満足度ダミーを加えたものを推定した。推定結果は付表1に示す。予想通り、進学時の満足度が高いほど、3つの指標全てが高くなる傾向がみられる。高位校出身の推薦・A0入試入学者の自発性は有意ではなくなったが、まじめさに関しては、ダミーを加えることで推薦・A0入試組ダミーの係数値は低くなるもののそれほど大きな変化ではなく、中位校出身者を除き有意のままである。この結果からすると、推薦入試やA0入試によって、大学への志望度だけでなく、勉学への姿勢に基づいてもある程度選抜できていると考えられる。

最後に、勉学以外の活動について同様の分析を行う。利用している調査では、回答者がこれまでの大学生活の中でどのくらい力を入れてきたかを、10の項目に関して、「とても力を入れた」から「全く力を入れなかった」までの5段階で自己評価している<sup>26</sup>。ここでの項目のうち、サークルや部活動、学校行事やイベント、アルバイト、社会活動（ボランティア、NPO活動などを含む）、の4つの項目について順序ロジットモデルで推定した。学年や学部系統によって課外活動に使える時間に違いがあるかもしれないので、説明変数には定数項、推薦・A0入試組ダミーの他に、学年ダミー、理系ダミーを加えた。

表7では推薦・A0入試組ダミーの係数推定値が有意かどうかをまとめた。高位高校出身者でのみ、推薦・A0入試組のほうが学校行事やイベント、社会活動に力を入れたという結果がみられる。また先ほどと同様に、高位校出身者の学校行事やイベントと、社会活動において、進学時の満足度ダミーも説明変数に加えて推定すると、学校行事やイベントにおいては推薦・A0入試組ダミーの係数が小さくなり有意でなくなった（表は省略）。難関大学では推薦・A0入試で大学への熱意が高い者を受け入れることで大学での行事ごとを活性化できているのかもしれない。一方で社会活動については進学時満足度ダミーを入れても推薦・A0入試組ダミーの値はほぼ変わらず、1%水準で正に有意であった。難関大学では、このような筆記試験では測りにくい面での評価が重視されているのかもしれない。

<sup>25</sup> 大学での授業の出席率に関しても同様の結果がみられる。ここでは具体的な数値は省略するが、推薦・A0入試組の方がどの出身高校ランクでも出席率が高く、特に低位高校出身者での差が大きい。

<sup>26</sup> 「大学生活ではやっていない」もあるが、これは「全く力を入れなかった」に合算する。

表 6 出身高校ランク別、大学の授業への取り組みの推薦・AO入試組ダミーへの回帰

	低			中			高		
	双方向性	まじめさ	自発性	双方向性	まじめさ	自発性	双方向性	まじめさ	自発性
推薦・AO入試組	0.0940 (0.1001)	0.4497*** (0.1013)	0.0191 (0.0996)	-0.0737 (0.0534)	0.1145** (0.0528)	-0.0055 (0.0530)	0.0617 (0.0720)	0.1991*** (0.0729)	0.1464** (0.0736)
定数項	-0.0859 (0.1109)	-0.2584** (0.1123)	-0.0605 (0.1104)	0.0091 (0.0546)	-0.0405 (0.0540)	-0.0048 (0.0542)	0.1053 (0.0546)	-0.0141 (0.0552)	0.0170 (0.0557)
観測数	490			1,643			1,607		
調整済みR <sup>2</sup>	0.0011	0.0332	-0.0087	0.0021	0.0009	-0.0017	-0.0003	0.0027	0.0012

説明変数：学年ダミー、理系ダミーも含む

\*\*\*: 1%水準で有意, \*\*: 5%水準で有意, \*: 10%水準で有意

表 7 出身高校ランク別、これまでの大学生活の中でどのくらい力を入れてきたか（順序ロジット）：推薦・AO 入試組係数

	低	中	高
サークルや部活動	ns	ns	ns
学校行事やイベント	ns	ns	++
アルバイト	ns	ns	ns
社会活動	ns	ns	+++

+++：1%水準で正に有意，++：5%水準で正に有意，+：10%水準で正に有意

---：1%水準で負に有意，--：5%水準で負に有意，-：10%水準で負に有意

ns：両側10%水準で非有意

この項での結果をまとめる。まず、推薦・AO 入試入学者が進学時に持っていた、現在の大学に進学したことへの満足度は、どのランクの高校の出身でも大学に入った後ある程度維持されていることが示唆された。そして前項の高校生時点での特性では出身高校ランクによる異質性がみられたが、本項でも高位高校出身者の間では推薦・AO 入試入学者の方が授業で求められること以上に自発的に勉強をする傾向があり、また勉学以外の活動についても、学校行事やイベント、社会活動に力を入れている傾向がみられた。このことから、高難易度の大学では推薦入試やAO入試によって、筆記試験で測られない面で望ましいと考えられる特性を持った学生を受け入れることに成功している可能性がある。しかし同時に、出身高校ランクに関わりなく、推薦入試やAO入試を利用して進学した者の方が、総じて大学の授業にはまじめに取り組んでいることが言えた。これは、高校時代の学校成績がこれらの入試方法で合否判断の1つに使われることがあるために、普段からまじめに授業に取り組む特性を持つ学生が選抜されているのかもしれない。推薦入試やAO入試で進学をした者の大学に対する志望度や熱意が高い傾向があることもこの結果に多少影響しているが、それだけでは説明がつかない部分もあり、やはり入試の際に授業に対するまじめさが評価されているように思われる。

#### 4.3. 大学でのパフォーマンス

分析の最後に、大学でのパフォーマンスを確認する。まずはスキル成長に関する学生自身による自己評価を利用する。調査では、28項目について、大学生活全体を通じてどの程度身についたと思うかを回答者自身に評価してもらっている。各項目は、「かなり身についた」から「全く身につけていない」までの4段階で評価されている。ここでの回答に主成分分析を用い、「認知」、「非認知」、「対人」という3種類のスキルの成長の指標を作成した。「認知」は、外国語での読み書きや、ものごとを批判的・多面的に考える、自分の知識や考えを文章で論理的に書く、といった認知スキルを表している。「非認知」には、自分の感情を上手にコントロールする、自分に自信や肯定感をもつ、といった項目を使用している。「対人」は、人と協力しながらものごとを進める、社会や文化の多様性を理解し尊重する、といった対人関係のスキルを表している。各指標を作成するのに使用した項目については付録に示してある。作成された各指標は、平均0、標準偏差1となるように標準化する。

表8では、それぞれのスキルの伸びの指標を定数項、推薦・AO入試組ダミー、学年ダミー、理系ダミーへと、出身高校ランク別に回帰した結果を示す。低・中位高校出身者では、入試方法による違いはどの

スキルにおいても有意ではなかった。一方、高位高校出身者では、すべてのスキルについて推薦・A0 入試組の方が身についた具合が有意に高くなっている。これは、前項、前々項と共に、高難易度の大学では推薦・A0 入試によって優秀な学生を獲得できている可能性を示している。

先ほどの項で、推薦・A0 入試組のほうが大学の授業にまじめに取り組む傾向があることを示したが、このことがこれらのスキルの成長に貢献している可能性がある。同志社大学社会学部のデータを用いた西丸（2010）では、推薦・A0 入試や内部高推薦入学者と筆記試験入試入学者とで大学の学業成績にあまり違いが見られない理由の 1 つとして、前者が授業にまじめに取り組んでいることを示している。本論文では説明変数に前項で作成したまじめさの指標を加えて同様の回帰を行った。表 9 の推定結果によると、大学の授業にまじめに取り組んでいる者ほど、どのスキルについても身についた具合を高く回答している傾向にある。先ほどは 1%水準で正に有意であった高位校出身の推薦・A0 入試組の係数値は、まじめさの指標を入れることで、有意ではあるものの、大きさは小さくなった（認知スキル、対人スキルは 10%水準で有意、非認知スキルは 5%で有意）。低・中位校出身者では先ほどは推薦・A0 入試組ダミーはどれも有意でなかったが、まじめさ指標を入れることで中位校出身者の認知スキルの成長については 1%水準で負に有意となった。低位校出身者では有意ではないものの負の方向に全てのスキルで値が大きくなっている。この結果からすると、推薦・A0 入試入学者に見られるまじめさは大学でのスキルの伸びにプラスの影響を与えており、もし大学入学時点で筆記試験入試組よりも学力・能力が低かったとしても、その差はまじめさにより埋められる可能性もある。

調査ではこれまでの大学の成績についても尋ねている。大学によって成績評価制度が異なり、回答者は、4段階評価（優（A）、良（B）、可（C）、不可（D）および未修得）の各評価の割合、または、GPA で回答している<sup>27</sup>。そこで、ここでは 4段階評価で回答されたものについては GPA へと変換して利用する<sup>28</sup>。表 10 では、大学での GPA を、定数項、推薦・A0 入試組ダミー、学年ダミー、理系ダミー、国公立大ダミー、非 GPA 成績評価ダミーへと、出身高校ランク別に回帰した。国公立ダミーを加えたのは、成績評価の基準が大学によって異なる可能性があるためである。推薦・A0 入試組ダミーは低位高校出身者で 10%水準で正に有意ではあるが、他のランクの高校出身者では有意でない。個別の大学を扱った多くの先行研究と同様、全体的には利用入試方法と大学での成績にあまり強い関係は見られない。

気になると思われる点として、先ほど高位高校出身者では推薦・A0 入試入学者の方がスキルの伸びが大きかったのにも関わらず、今回の GPA については差が見られなかったことがある。これにはいくつかの理由が考えられる。例えば、推薦・A0 入試入学者の入学時の学力が筆記試験入試入学者よりも低かったとしたら、大学でのスキルの伸びが大きくても達成レベルで評価される GPA では差が付かない可能性がある。高校生時点での特性を見た限りでは推薦・A0 入試入学者のほうが劣っているようにはみられなかったものの、大学入学時点での学力の直接的な指標があったわけではないため、この可能性も排除できない。もしくは、ここで利用しているスキルの伸びは回答者自身の自己評価なので、推薦・A0 入試入学者がスキルの伸びを過大評価している可能性もある。また、そもそもここで測られているスキルと GPA があまり対応していない可能性もある。GPA は履修した授業の難易度を捉えることはできないし、大学での評価基準の違いを十分にコントロールできていない可能性もある。ここでこれらの可能性をきちんと

<sup>27</sup> 5段階評価の場合は、「秀、優」を「優（A）」と答えている。

<sup>28</sup> 変換にあたっては、優（A）を 4.0、良（B）を 3.0、可（C）を 2.0、不可（D）および未取得を 0 としている。

表 8 出身高校ランク・入試方法別、大学生生活全体を通じてのスキルの伸び

	低			中			高		
	認知	非認知	対人	認知	非認知	対人	認知	非認知	対人
推薦・AO 入試組	0.0748 (0.1057)	0.0773 (0.1040)	0.0265 (0.1061)	-0.0772 (0.0531)	-0.0358 (0.0532)	-0.0301 (0.0528)	0.1843*** (0.0709)	0.2182*** (0.0718)	0.1844*** (0.0704)
定数項	-0.2191* (0.1171)	-0.1123 (0.1152)	-0.0366 (0.1176)	-0.0168* (0.0543)	0.0484 (0.0544)	0.1092** (0.0540)	0.0287 (0.0537)	0.0306 (0.0544)	0.0872 (0.0533)
観測数	490			1,643			1,607		
調整済み R <sup>2</sup>	0.0010	-0.0051	0.0012	-0.0002	0.0020	0.0219	0.0032	0.0033	0.0086

説明変数：学年ダミー、理系ダミーも含む

\*\*\*: 1%水準で有意, \*\*: 5%水準で有意, \*: 10%水準で有意

表 9 出身高校ランク・入試方法別、大学生生活全体を通じてのスキルの伸び：大学授業でのまじめさ含む

	低			中			高		
	認知	非認知	対人	認知	非認知	対人	認知	非認知	対人
推薦・AO 入試組	-0.1398 (0.0960)	-0.1216 (0.0958)	-0.1533 (0.1001)	-0.1252*** (0.0484)	-0.0806 (0.0491)	-0.0681 (0.0499)	0.1162* (0.0666)	0.1481** (0.0672)	0.1268* (0.0675)
大学授業でのまじめさ	0.4772*** (0.0422)	0.4423*** (0.0421)	0.3999*** (0.0440)	0.4195*** (0.0226)	0.3916*** (0.0229)	0.3316*** (0.0233)	0.3420*** (0.0228)	0.3521*** (0.0230)	0.2850*** (0.0231)
定数項	-0.0958 (0.1048)	0.0020 (0.1047)	0.0667 (0.1094)	0.0002 (0.0494)	0.0643 (0.0502)	0.1226** (0.0510)	0.0335 (0.0503)	0.0356 (0.0508)	0.0912* (0.0510)
観測数	490			1,643			1,607		
調整済み R <sup>2</sup>	0.2085	0.1799	0.1450	0.1734	0.1524	0.1291	0.1259	0.1302	0.0944

説明変数：学年ダミー、理系ダミーも含む

\*\*\*: 1%水準で有意, \*\*: 5%水準で有意, \*: 10%水準で有意

検証するにはデータが不十分であり、結論を出すことはできない<sup>29</sup>。

大学でのパフォーマンスに関しては、より客観的で正確な指標を用いての検証が将来的に必要である。しかし、ここまでの結果では、同ランク校出身者間で、推薦・A0入試組のほうが筆記試験入試組よりも大学でのパフォーマンスが劣るといった証拠はないといえる。

表 10 出身高校ランク別、大学 GPA の回帰

	低	中	高
推薦・A0入試組ダミー	0.1268* (0.0683)	0.0393 (0.0366)	-0.0228 (0.0493)
定数項	2.6401*** (0.0905)	2.7080*** (0.0442)	2.8278*** (0.0441)
観測数	490	1,643	1,607
調整済み R <sup>2</sup>	0.0742	0.0803	0.0947

被説明変数：大学 GPA

説明変数：学年ダミー、国公立大ダミー、理系ダミー、非 GPA 成績評価ダミーも含む

\*\*\*: 1%水準で有意, \*\*: 5%水準で有意, \*: 1%水準で有意

## 5. まとめ

「誰が大学に行くのか」と「誰がどこの大学に行くのか」を決める大学入試は、大学進学を希望する学生にとって一大イベントであるだけでなく、学生と大学の間には補完性がある限り人材育成の観点から社会にとっても重要な話題である。日本の大学入試方法は、筆記試験によって合否を決める筆記試験入試と、調査書、志望動機書、面接などを通じて多面的・総合的に学生を評価する推薦・A0入試の2つに大きく分けられる。推薦入試やA0入試は筆記試験入試よりも早い時期に行われる。つまり、日本は学生の評価軸と試験実施時期の両方で異なる入試方法が並立している珍しい国である。

本研究では、大学入試難易度と推薦・A0入試の役割との関係性を考察した。推薦入試やA0入試が果たしている役割が大学の入試難易度によって異なる可能性は今までに全く指摘されてこなかったわけではないが、その異質性をデータで示した研究は今までなかった。本論文ではまず、2020年度大学入試情報を用いて、推薦入試やA0入試を導入している大学の割合が設置形態や偏差値、学部系統によってどのように異なるかを概観し、A0入試は、高偏差値の理系学部を除いた私立大学での導入割合が高かった一方で、国公立大学では偏差値に関係なく、導入している大学は半数以下であったことを示した。推薦入試は、設置形態や学部系統、偏差値に関わらず、大部分の大学で導入されていた。

本論文の主要分析では、「第一回大学生の学習・生活実態調査」の個票データを用い、高校生の時の特性、大学内外での態度・行動、そして大学のパフォーマンスと言う3つの観点から、学業面を中心としたさまざまな面で、筆記試験入学者と推薦・A0入試入学者の違いについてまとめた。なお、大学名のデー

<sup>29</sup> 低・中位校出身の推薦・A0入試入学者についても、もし大学入学時の学力が同ランク校出身の筆記試験入試入学者よりも低く、大学でのスキルの伸びが同程度だとしたら、GPAは彼らの方が低くなるはずである。しかし分析で結果ではGPAに差はみられない。これについても本文中に述べたものと同様の議論があてはまると考える。

タは公表されていないため、この分析では大学進学度に基づいた出身高校のランクによる異質性に着目をした。

記述分析の結果、学生が推薦・A0入試をどのように利用しているかが出身高校のランクによって異なっている可能性が示唆された。低位高校では高校時代にアルバイトや部活動に精を出してあまり勉強していなかった者が大学に進学する手段として利用している一方、高位高校ではもともと大学には進学するつもりの方が推薦・A0入試に有利な特性を持っていたという理由で利用しているという姿が浮かび上がった。そして、高位校出身の推薦・A0入試入学者の場合は授業で求められたこと以上に勉学に取り組む、学校行事やイベント、社会活動に力を入れている傾向がみられた。そして、認知スキル、非認知スキル、対人スキルの全てにおいて大学で伸びたと感じている具合が筆記試験入試入学者より高かった。高難易度大学では勉学への自発性や、社会活動への態度といった、筆記試験で測れない面で望ましい特性を持つ者を推薦・A0入試によって獲得できている可能性がある。大学入試方法の分析にあたっては、大学難易度による異質性を考慮する重要性を示唆している。

しかし同時に、分析結果からは推薦・A0入試入学者が筆記試験入試入学者と比べて学業面や態度で劣っているという証拠はみられなかった。出身高校ランクに関わらず、推薦・A0入試入学者は同じランクの高校出身の筆記試験入試入学者と比較して大学には満足して進学した傾向があり、その満足度は入学後もある程度維持されていた。更に、彼・彼女らは大学の授業にまじめに取り組む傾向がみられた。低・中位校出身者では、大学入学時点で筆記試験入学者よりも学力・能力が低かったとしてもその差がまじめさで埋められている可能性がある。推薦・A0入試が大学生の学力低下の要因だと社会的に評価されがちということには、これらの入試を導入している大学の割合が偏差値の低い大学の方で大きいことが影響している。確かに、推薦・A0入試によって学力の低い学生が大学に進学しているのは事実だが、偏差値の低い大学で推薦・A0入試を廃止して全て筆記試験入試にしても、現在よりも良い学生を獲得できるかは不明である。

大学の難易度や高校のランクに注目してデータ分析を行った先行研究が見当たらなかったため、本論文は、研究のまず第一歩としての基本的な記述分析となっている。本論文で確認された事象を基として、入試方法を巡る学生と大学に関するモデルの構築や、入試方法が学生の大学進学や進学大学の選択に与える影響といった、更なる研究が考えられる。ただ、大学入試方法に関する研究が進んでいくためにはデータの拡充が不可欠である。本論文では2008年のデータを用いたが、A0入試は近年更に拡大しているため、現状をより正確に把握するには新しいデータを用いての分析をしなければならない。また、今回利用したデータにはなかった、出身高校や進学先大学のデータ、学力の客観的な指標などがより説得的な分析を行うためには必要となる。本論文でできなかった、高校と大学の組み合わせの精査にもこのような情報が必要である。大学入試に対する社会での高い注目度・重要度にも関わらず、現時点では大学入試方法の情報を集めている調査自体が少ない。今後のデータのより一層の充実が望まれる。

## 参考文献

- Avery, Christopher, Andrew Fairbanks, and Richard Zeckhauser. 2003. *The Early Admissions Game: Joining the Elite*. Harvard University Press.
- Avery, Christopher, and Jonathan Levin. 2010. "Early Admissions at Selective Colleges."



*American Economic Review* 100 (5), pp.2125-2156.

Chapman, Gabrielle, and Stacy Dickert-Conlin. 2012. "Applying Early Decision: Student and College Incentives and Outcomes." *Economics of Education Review* 31 (5), pp.749-763.

Jensen, Elizabeth J., and Stephen Wu. 2010. "Early Decision and College Performance." *Economics of Education Review* 29 (4), pp.517-525.

Li, H., and W. Suen. 2000. "Risk Sharing, Sorting, and Early Contracting." *Journal of Political Economy* 108 (5), pp.1058-91.

大島真夫. 2002. 「推薦入学方式で入学する学生の意識と行動：一般入試入学者との比較から」『全国大学生活協同組合連合会「学生生活実態調査」の再分析』, pp.66-79.

尾室拓史. 2012. 「A0入試に対する社会的評価の変遷：新聞紙上における語られ方の分析」『Keio SFC Journal』 12 (2), pp.109-120.

浦坂純子, 西村和雄, 平田純一, 八木匡. 2013. 「大学入試制度の多様化に関する比較分析：労働市場における評価」『RIETI Discussion Paper Series』.

加藤敬子. 2010. 「お茶の水女子大学A0入試の現状」『高等教育と学生支援』 1, pp.37-48.

高橋大樹, 渡部博志, 積田淳史, 宍戸拓人. 2017. 「入試選抜方法と学修プロセス：大学への適応・授業への取り組み・教員のサポートに対する近くの観点から」『武蔵野大学政治経済研究所年報』 15, pp.263-302.

中西啓喜. 2017. 「国立大学は推薦・A0入試によって『成績優秀な学生』を獲得できているのか？：エリートセクターにおけるマス選抜の導入」『高等教育ジャーナル：高等教育と生涯学習 24』, pp.63-74.

西丸良一. 2010. 「入学者選抜方法による大学の学業成績：同志社大学社会学部を事例に」『同志社大学教育開発センター年報』 1, pp.16-25.

ベネッセコーポレーション. 2009. 「大学生の学習・生活実態調査報告書」『研究所報』 Vol. 51.

渡辺哲司, 福島真司. 2008. 「公表データからみるA0入学者の評価：国公立16大学からの追跡調査報告レビュー」『大学入試研究ジャーナル』 18, pp.131-136.

## 付録

大学での勉学面の態度・取り組みの指標作成に使用した項目

双方向性：クラスの全員の前で、積極的に質問や発言をする；グループワークやディスカッションで自分の意見を言う；グループワークやディスカッションでは、積極的に貢献する；グループワークやディスカッションでは、進んでまとめ役をする；グループワークやディスカッションでは、異なる意見や立場に配慮する；グループワーク以外で、友だちと一緒に勉強する

まじめさ：授業に必要な教科書、資料、ノートなどを毎回持参する；授業に遅刻しないようにする；履修登録した科目は途中で投げ出さない；授業中は黒板に書かれていない内容もノートにとる；授業中に私語をしない；授業で出された宿題や課題はきちんとやる；レポートやテストを提出する前に見直す；授業

で配布された資料などを整理する；できるかぎり良い成績をとろうとする

自発性：授業の予習をする；授業でわからなかったことは先生に質問する；授業の復習をする；授業でわからなかったことは、自分で調べる；授業で興味をもったことについて自主的に勉強する；授業とは関係なく、興味をもったことについて自主的に勉強する；グループワーク以外で、友だちと一緒に勉強する；資格や勉強の学校などに通って勉強する；計画を立てて勉強する；自分の意思で継続的に勉強する

大学生活でのスキル成長の指標作成に使用した項目

認知：異なる意見や立場をふまえて、考えをまとめる；自分の知識や考えを文章で論理的に書く；自分の知識や考えを図や数字を用いて表現する；コンピュータを使って文章・発表資料を作成し表現する；外国語で読み、書く；外国語で聞き、話す；文献や資料にある情報を正しく理解する；コンピュータを使ってデータの作成・整理・分析をする；多様な情報から適切な情報を取捨選択する；ものごとを批判的・多面的に考える；現状を分析し、問題点や課題を発見する；問題を解決するために、数式や図・グラフを利用する；仮説の検証や情報収集のために、実験や調査を適切に計画・実施する；筋道を立てて論理的に問題を解決する；既存の枠にとらわれず、新しい発想やアイデアを出す；幅広い教養・一般常識を身につける；専門分野の基礎的な知識・技術を身につける

非認知：進んで新しい知識・能力を身に付けようとする；自分で目標を設定し、計画的に行動する；自分の感情を上手にコントロールする；自分の適性や能力を把握する；自分に自信や肯定感をもつ

対人：人と協力しながらものごとを進める；自ら先頭に立って行動し、グループをまとめる；異なる意見や立場をふまえて、考えをまとめる；社会や文化の多様性を理解し、尊重する；国際的な視野を身につける；社会の規範やルールにしたがって行動する；社会活動（ボランティア、NPO活動などを含む）に積極的に参加する

付表 1 出身高校ランク別、大学の授業への取り組みの推薦・AO入試組ダミー、進学時満足度への回帰

	低			中			高		
	双方向性	まじめさ	自発性	双方向性	まじめさ	自発性	双方向性	まじめさ	自発性
推薦・AO入試組	0.0020 (0.1033)	0.3509*** (0.1036)	-0.0353 (0.1030)	-0.1197** (0.0540)	0.0850 (0.0535)	-0.0555 (0.0534)	0.0185 (0.0727)	0.1573** (0.0739)	0.1107 (0.0746)
まあ満足して進学	-0.1573 (0.1131)	-0.4382*** (0.1135)	-0.3191*** (0.1128)	-0.2613*** (0.0556)	-0.2611*** (0.0551)	-0.2716*** (0.0550)	-0.2476*** (0.0566)	-0.1411** (0.0575)	-0.1985*** (0.0580)
やや不満足だが進学	-0.1491 (0.1683)	-0.3471** (0.1689)	-0.2058 (0.1679)	-0.2686*** (0.0804)	-0.2262*** (0.0797)	-0.3016*** (0.0796)	-0.0459 (0.0741)	-0.0848 (0.0753)	-0.0967 (0.0760)
やむをえず進学	-0.6076*** (0.1873)	-0.6581*** (0.1879)	-0.3677** (0.1867)	-0.4717*** (0.1002)	-0.2668*** (0.09932)	-0.4870*** (0.0992)	-0.3068*** (0.0902)	-0.3020*** (0.0917)	-0.2116** (0.0925)
定数項	0.1210 (0.1361)	0.0959 (0.1366)	0.1691 (0.1357)	0.2331*** (0.0672)	0.1509** (0.0666)	0.2308*** (0.0665)	0.2519*** (0.0656)	0.0967 (0.0667)	0.1411** (0.06731)
観測数	490			1,643			1,607		
調整済みR <sup>2</sup>	0.0165	0.0659	0.0036	0.0206	0.0137	0.0192	0.0139	0.0088	0.0075

説明変数：学年ダミー、理系ダミーも含む。進学時満足度ダミーは、「ぜひ入りたいと思って進学」との比較。

\*\*\*: 1%水準で有意, \*\*: 5%水準で有意, \*: 10%水準で有意